哲学研究　第五百四十六号　一〇八

新刊紹介

中久郎『デュルケームの社会理論』

（本文四九六頁。序文、あとがき、凡例、目次計一六頁。人名索引および事項索引九頁。創文社、昭和五十四年刊）

中島道男

フランスの社会学者エミール・デュルケームはいわゆる「世紀の転換期」に活躍した社会学上の「巨人」のひとりである。一九一七年の没であるから死後すでに半世紀以上たっている。しかもこの社会学者の研究について、現在特筆すべきことは、六〇年代後半あたりから本国フランスは勿論、英米、そして我が国においても〝再評価〟の気運が高まり、「デュルケーム・ルネッサンス」と呼ばれるほどの活況を呈してきていることである。こうした動きのなかでこそ、デュルケーム研究の意義は何か、〝何故いまデュルケームか〟と問うことが必要であるが、研究者はそれには未だ充分自覚的ではなかった。この問いをさしあたり別とすれば、〝再評価〟の表面的かつ象徴的動機となったのは、まずドレフュス派としてのデュルケームの発言であろう。「私は弾劾する」というエミール・ゾラの言葉で名高いドレフュス事件において、ユダヤ系のデュルケームは知識人・市民としてドレフュス無罪のために論陣を張ったのである。解釈者たちは事件の渦中で書かれた論文「個人主義と知識人」に注目することによって、個人の人格の尊重という、デュルケームの「道徳的個人主義」がもつ意義を示した。デュルケームのこの観念は、個人に対して社会の優位を主張する保守主義者デュルケームという、従来のステレオタイプ化した解釈を揺がすものであった。彼はドレフュス派として、個人の人格は国家理性の上位にあると主張し軍部をさえ批判していたのである。デュルケーム理論の捉え直しが盛んとなったのはむろんこうした面からだけではない。更に、レヴィ＝ストロースを中心とする「構造主義」もまた――デュルケーム理論にまでその〝先祖探し〟を徹底的に行ない、デュルケームと「構造主義」との連続性は充分評価されつつあるが、そのことで両者の落差が無視されてはならないのは勿論である――デュルケーム〝再評価〟の動きを推進したもののひとつといえる。

こうして、〝ウェーバー＝マルクス問題〟という問題状況のなかで多くの研究が進められてきた・同じ「巨人」のひとりであるウェーバーと比べて、その研究が体系だっていなかったデ

ュルケーム研究も最近頓に盛んになってきた。中 久郎教授の『デュルケームの社会理論』は、こうした〝再評価〟の動きを踏まえつつもそれに過度に左右されることなく独自になされた研究の、現時点での成果であろう。本書の特徴は、類書にありがちなトピック別の紹介では全くなく、そうした個々の論点となって現れつつ、それを支えているデュルケームの社会概念のその検討を中心に据えているという点である。その意味で、「決して網羅的でもない」(序文)とあるが、逆に網羅的といえる。そもそも、「デュルケームの著作においては、〝社会〟ほど難解でありながらもありふれた言葉はない。この言葉の多様な意味とその意味の多様なレヴェルを把握することは、デュルケーム思想全体を理解することにほとんど等しい」(ベラー)、と言われるほどである。

本書の書評は浅学非才の筆者には荷が勝つので、筆者のデュルケーム研究に資するためにもここでは、デュルケームの社会概念を中心に本書の内容をフォローしていきたい。なお、全十章五百頁に及ぶ本書の内容をすべてカバーすることはできないし、とりあげた章でも筆者の問題関心に従った紹介であることを予めお断りしておきたい。

なお、本書の章構成は以下のとおりである。――第一章「社会概念の構成」、第二章「社会学の性格規定」、第三章「集合意識の存在構造」、第四章「社会の共同態的特性」、第五章「社会認識の視座構造」、第六章「社会についての認識方法」、第七章「機能分析の方法」、第八章「行為理論への関連」、第九章「自殺研究の問題」、第十章「社会連帯論と社会主義」。

一

デュルケームによる社会の概念化の前提には、「生きている社会」についての綜合化的認識がある。デュルケームが社会を生命性において捉えているというこの指摘が、本書の基本的かつ革新的な主張である。つまり、諸個人をその能動的要素として成立する独自な実在である社会は、"la vie sociale"は、生物モデルに拠った「生きている社会」の本質表現である以上、「社会生命(=いのち)」だとされる。

生命性において捉えられた社会観というこの指摘は、更に、ソキエタスではなくコムニタスとしての社会観と密接に関連させて捉えられている。つまり、社会をば、「自由な諸個人間の契約による目的的な結合の所産とみる近代自然法論的系譜のものとは異なり、人間の生の集合的に直接的な表現であるとみる集合主義的なコムニタスの観念」(二三八頁*)によって特徴づけるという視点である。それ故、デュルケームにおいて社会の基本状態として考えられているのは、その「まとまり」=凝集を本質的に諸信念と諸観念の共同性に負うような社会である。つまり、自生的な社会が前提とされている。

更に、このことは倫理的・宗教的実在としての社会、道徳生活の本拠としての社会、という社会観に関連する、と見做さ

れる。つまり、社会の凝集力の根底には宗教的-聖的な世界に属する同じ存在があると考え、聖なる存在と関連している集合表象を聖なる時間において更新する集合的沸騰のなかに社会を統合化する道徳的原理の源泉を求めるというデュルケームの側面が指摘される。

このような社会観を有するデュルケームの思想はまた独特の人間観を示している。それは、人間は本質的に社会的存在であらねばならないということであるが、それが意味するのは、人間の本質や真の存在性は道徳的な共同態に関わり、それを内なるものにしているという意味で社会的(sociétaire)である、ということである。道徳的な共同態は理想形態において、人間性の真の自発的表現なのである。ここから、社会は個人に超越的でありながら、しかも個人に内在的であるというデュルケームの周知の考えも理解することができる。

デュルケームの社会観は、このような理想的意味合いにおける社会と個人との統合だといわれる。後に紹介するように、こうした社会観と人間観が一体となって理論と実践とを統合するところに、デュルケーム社会学の魅力が醸しだされる、といわれている。

なお、ここで〝道徳的〟というタームのもつ意味合いについて触れておく必要がある。――著者によれば、それのもつ多様な意味のひとつとして、拘束力の源泉が集合生活の自発的・自生的所産である限りこの力が〝道徳的〟というふうに規定される場合がある。従って、前述の理論と実践の統合も、自生的な社会、道徳的な共同態を基礎にしてはじめて生れるといえる。しかも、著者はこの点と同時に、「科学の実践的意義を、それにより人間に真の自由な行為をもたらすための用具性によって規定」(一九五頁)するデュルケームの側面も強調し、ここから、「道徳的拘束が自由意志によって受容されなければならないというデュルケームによる提言」(一九六頁)も理解している。つまり、拘束力の源泉が自発的・自生的であることと並んで、それが理性によって指導されたものでなければならないという主張をデュルケームのなかに読むのである。

本書全体の導入部である第一章で述べられている以上の諸点を中心に、これを敷衍するかたちで、本書の紹介を行ないたい。

*本稿は各章ごとの紹介を基本にしているので、異なる章からの引用部分にのみその頁数を付す。

二

デュルケームの「社会」の中核的意味は、〈生きている系〉としてのそれの本質、「生命的な何ものか」であることは、すでに確かめた。著者は、社会の本質であるこの集合的生命をギュルヴィッチの「社会的枠組」(cadre social)の類型論との比較で論じている。すなわち、それは、「社会的交渉態」(sociabilité)の下位類型で諸個人意識間の「相互浸透」から成り立つ「われわれ」(Nous)の特定形態だとされる。ギュルヴィ

ッチのいう「われわれ」には、全体と部分の「相互内在性」の程度により「大衆」(Masse)、「共同態」(Communauté)、「合一態」(Communion)の区別が可能であるが、デュルケームの社会の本質は、この後の二者によって特徴づけることができる。

デュルケームのこうした「社会」には、個人間の人格的あるいは感情的な結合を前提とした・個人主体の関与による〈道徳的〉な「われわれ意識」の体験が考慮に入れられている、と著者は指摘する。ギュルヴィッチにおいて先の「われわれ」と対比的に捉えられているのは「他者関係」(rapports avec autrui)であるが、デュルケームのなかでこの「他者関係」にあたるものが「動的密度」という概念である。道徳的緊縮(resserrement)としての「動的密度」が含む二つの異なった過程側面——心的接触過程と道徳的接触過程——のうち、後者は、単なる相互行為としての接触ではなく、関係を結ぶ人間相互の直接的あるいは〈内的な〉結合(association)として現れる。デュルケームのいう「社会」の本質である集合的生命はこの結合から生じる。ここで述べた「他者関係」と「われわれ」の関係についての考えが、分業による「他者関係」が如何なる条件のもとで、それ固有の道徳的規範性を具現し得るかというデュルケームの問題関心の基礎にあると見做される。

このデュルケームの「社会」を、著者は更にフィーアカントの社会観との比較で論じている。すなわち、フィーアカントは、「内的結合」(innere Verbundenheit)を重視し、この内的結合の過程で諸個人を相互に結びつけている絆——心的結合と倫理的結合——によって諸個人のあいだに共有される「われわれ意識」(Wir-Bewusstsein)の体験を、社会の観念の唯一の基礎範疇だと考えるが、これと一致する側面がデュルケームにはあるのである。フィーアカントの内的結合と対比するならば、能動的な「倫理的結合」にあたるのが、「利己的性向」が「愛他的性向」と密接に関連することについてのデュルケームの論議である。このとき、愛他的性向は行為主体による能動的経験としてある。そして、この場合の「われわれ」は「望ましいもの」として現れ、「われわれ」＝社会は道徳的理想としての存在理由をもってくる。

このことはデュルケームの社会連帯論で確かめられる。つまり、社会連帯は個人(部分)の社会(全体)への依存状態を意味する客観的・生物学的な規定のほかに、倫理的な意味賦与がなされている。このとき、社会連帯は道徳的義務や理想によって諸個人が社会に〈帰依〉している状態のことであり、社会は理想的価値源泉として重視される。

以上のようにデュルケームには、その思想の根底に「道徳的共同態」への志向があり、それは、彼の社会学的理論構成の全体に決定的意義をもっている、と著者は指摘している。一でみたように、この志向は社会の本質に対する概念化を前提にした彼の社会観の、その集約的な表現である。ここから、科学としての社会学の方向が道徳的共同態の実現に如何に寄与できるかについての基本的示唆が生れるのである。

この二での論議は本書第四章に基づいているが、筆者の以下での紹介は最後に触れたようなデュルケームの問題関心を前面に押しだした選択的なものである。

三

前述のような社会概念を根底に据えたデュルケームのその社会分析の特徴を第五章に拠って概観することにする。

デュルケームは、「社会」の核心にある本質特性は、無限の可能性に溢れた集合生命的なものであると考えており、これが彼の全著作を一貫する基軸といえる。そして、この特性を基本として、価値論的、発生論的、発展論的、社会形態論的、構造－機能論的、病理論的、層位論的、実践論的視点の八つの視点が不可分的にデュルケームの〈視座構造〉を構成している。こうして著者は、デュルケーム社会学の全体を、社会生命に関する認識が要となり、先の諸視点が骨組みとしてできた扇に譬えている。そして、その地紙は、社会と個人の関係を問題として深められた理論を素材にしている、と論じている。

〈視座構造〉を構成する不可分的な八つの視点のうち特に重要なのは層位論的視点であろう。それは、社会の生命中に活動しているものや沸きたっているもののなかに、固定化された社会にしなやかさを与え、生成発展させる可能的な力が秘められている、と考える視点である。このように、著者によれば、デュルケームは社会生活を、沸きたっているものと固定化し硬直したものとの間の動的連関において捉えているのである。こうした社会生活の最深部にあって、社会を創造的な綜合のかたちで発展させるところの原動力つまり集合的生命の力、これがデュルケームの視座構成を統一づけるものである。

デュルケームの「層位論的視点」については従来から指摘されているが、これが本書のようにその前提となる「社会」の、その概念化にまで掘りさげられるとき、論議はより説得的となる。

この層位論的視点と並んで重要なのが発生論的（génétique）視点である。デュルケームは「社会」の本質を中心論題とするとき、その「始原」に深い関心を寄せ、社会の生成の「起源」に溯ってそれの本質性を把握しようとする。「起源的世界」に溯って、社会生命の最深部にある中核的要素を求め、そこに社会の歴史的生成の主要原動力をみるデュルケームの考え方の重要性を著者は強調している。この起源的要素は、その後現れてそれを豊かにした継起的付加物のもとに生きつづけるのである。ここから彼の理論における歴史解釈が意義づけられる。この点に関しての著者の論議は、啓蒙思想における「進歩の観念」の系譜でデュルケームの進歩－秩序観を捉えたもので、従来正しく解明されてこなかった部分を闡明する言わば本書の目玉のひとつであろう。しかし、ここではその詳細な紹介は割愛せざるをえない。ともかく、デュルケームの歴史認識の重要な特徴は、現在は過去からの派生物であるがその中にすでに未来が用意されていると考える点であることを、著者とともに確保

しておこう。すなわち、未来は制度化された現実態の中に潜み、今後顕著になってゆくであろう可能態なのである。従って、そこに前述の層位論的視点との接点があるし、社会そのものの本質に内在する「創造的威力」を前提にしている点で、それは彼に独特の社会の概念化の所産である。

なお、この点で意義深いのは、デュルケームの社会観をV・ターナーのそれと比較した第六章の記述である。社会を構造と反構造（コムニタス）とが継起する弁証法的な過程とみて、この両次元を社会の二つの対立物として対置させるターナーに対して、デュルケームは反構造を構造の枠組内での真に「社会的」な部分と考え、それを、構造に対し周期的に集合理想の息吹きを与えるところの、言わば社会の自己更新の契機とみているのである。つまり、自生的なコムニタスは社会の本質的な在り方を示す理想と考えられているが、それは日常世界では可能態であり、「社会構造の裂け目」にしか実現されえないものなのである。（本パラグラフは第六章に拠る。）

デュルケームは、この可能的趨勢についての論証を、社会を「道徳生活の本拠」とみる道徳社会学上の問題意識に導かれて行なっている、と著者は言う。つまり、二で確かめたように、デュルケームは社会進化の原動力たる集合的生命の表現過程に生動する・諸個人の人格的表出の意義を強調し、そこに実現されている道徳的共同態のうちに、生きた体系としての社会の統合原理を求めようとしたのである。ここに、社会生命の最深層位にある最もパトス的な力を成員に感じとらせ、同じ道徳的共同態に統合化させる非日常的高揚"合一態の意義が明確となる。しかし、一で述べた〝道徳的〟というタームの意味からすれば、固定化された社会構造に集合的生気を吹き込むこの合一態体験も、もちろん自生的に設定される規制により均衡条件が与えられるのでなければ、必要な変化の原動力となりえない。

こうした道徳的統合の考えには、一九世紀にフランス革命の反動として自覚的に成立し・啓蒙思想の合理主義に反対した哲学的保守主義の基本命題と共通する面があるが、単純にデュルケーム即保守主義者とするのは誤りである。むしろ、科学としての社会学の基礎を確立しようとする彼の努力は啓蒙思想による批判的合理主義や実証主義の系譜につらなるものであることが、特に彼のプラグマティズム論を通じて――旧い合理主義とプラグマティズム両者に関する彼の批判的見解の分析によって――彼の「合理主義」を明確にする努力のなかで示されている。

四

これまで述べてきたデュルケームの社会理論の特徴は、彼の機能分析論を第七章に拠って概観することで更に肉付けされよう。

デュルケームの機能分析の重要な論点のひとつは、〈生きた〉全体（体系）としての社会を、歴史的な生成発展のなかで捉え、機能分析を、その体系の動的秩序への考察に結びつける方

法である。そもそもデュルケームの社会像は、静態的に統合された安定体系ではなく、不断に生成する動的な体系なのである。デュルケームにあっては、この体系の「機能的要件」は、一つの有機体として組織された社会（体）が存続するための前提条件あるいは結果として考えられている。それは充足されなければならない「欲求」として構想されており、道徳的な社会連帯に求められている。

ここには、道徳が表現しているのは社会が〝健康に〟存続していくうえでの最も基本的な前提条件である、という考えがある。デュルケームの考える「社会的健康」（santé sociale）とは、有機体としての社会のその諸部分が社会的生命力を集中させるため最適の影響を与えることである。そして、デュルケームの機能分析にとって重要な方法論的根拠である正常と病理の区別の規準にも、正常＝健康性の原理が保持されていることが指摘されている。こうした意味において、デュルケームの言う「正常なもの」には「望ましいもの」（le désirable）の意味がこめられている。

ここから、機能分析に含まれる目的論的発想をいわば逆手にとって、その方法を実践的問題の解決に役立たせるというデュルケームのもうひとつの重要な論点がでてくる。つまり、正常＝健康といえる状態は、「当然あるべき状態」として多分に理想的な効果において規定され、道徳的な社会規制を重視するという基本的問題関心が前面におしだされることになる。この点で、デュルケームの機能分析は特定の価値関心を機能的欲求の中身（なかみ）のうちに持ち込んだものであるが、中身を別にすれば、形式的には現実に対する批判的認識やまた実践的関心に応えるよう十分役立たせることができる、と言える。しかも、この実践的関心への志向は、社会の欲求が〈構造的脈絡〉の制約のなかで考えられているが故に、科学としての社会学の確立にとり必要な方法規準に従っているということも指摘されている。

五

ここでは、今までその社会概念を中心にみてきたデュルケームの社会理論を、その社会主義論の分析を行なっている第十章に拠って更に綜合的に紹介しよう。なお、著者はきわめて早い時期にしかも適切にデュルケームの社会主義論を扱ったひとりであろう。（本章のもとになった論文は一九六九年のものである。）

社会主義を論題にしたとき、デュルケームの前提には、〈私的〉な集団である「職業集団」を、経済生活を規制できる道徳的拘束のための器官にしようとする考えがある。この点で、「職業集団」の再構成によって産業的諸活動の再統合を図ろうというデュルケームの社会主義は、〈社会学的〉社会主義の主張であり、それは、普仏戦争の破局に続く第三共和国のために必要な知的基盤を与えようとする意図に基づくものである。

道徳的な社会再組織の論議は、デュルケームにあっては有機的連帯論として展開されているが、そこで重要なのは、「経済

的諸機能は、それらを凌駕し抑制し規制する道徳的力に服させなければ、調和的に協働し得ないし、均衡状態に保たれ得ない」（『社会主義論』）という考えである。ここには、社会についての有機体的概念化が前提となっている。ここで、一の冒頭で触れたまま詳しくは説明しなかった社会の綜合的認識について紹介しておかなければならない。

それは、社会についての生物学的モデルに拠りつつ、社会諸現象を社会有機体のなかに完結し且つ限定されて生起する諸機能（活動）として考察し、各々の不可分の全体的関連をみようとするものである。このように考えるデュルケームにとって、従来のように、恰も経済が一つの全体を形成し、それ自体において十分であり、また、それ自体において説明可能であるかのように考えるのは誤りである。経済的活動は社会的機能であり、社会そのものに、すなわち集合的存在に同じく関係する他の諸機能と連帯の関係にあるのである。これがデュルケームの綜合社会学的発想の基礎にあるものである。（本パラグラフは本書第二章に拠る。）

こうした考えを背後にもつ・「職業集団」の再編成というデュルケームの提言は、産業化・分業化の進展という〈構造的脈絡〉の下で、社会の道徳的連帯という「欲求」に対応する「機能的」な分業形態を確定しようという前述の機能分析の考えに基づいている、と著者は言う。こうして、デュルケームは「有機的」ないし「積極的」な形態を機能的つまり「正常」と考えた。しかし、現実は病理的形態が普遍的であり、「正常」な形態は例外的な形態にすぎず可能態としてある。そして、著者によれば、デュルケームの中心的関心事は、この正常的形態の成長促進に与る社会的諸条件を科学的に確定することであった。その結果のひとつとして「職業集団」の再編成の提言があるのである。このように、彼の提言は社会の道徳的再組織のための理想表現として捉えることができる、と解釈されている。デュルケームの有機的連帯論は、正常な状態を予め措定した言わば「論点の先取り」に依存しているということになる。

デュルケームのこうした社会連帯の思想の根底には、「社会」が理想として与えられていることが必要だとする前提があり、その社会観には個人主義をその統合原理とする道徳的な共同態についての哲学が前提となっている。分業化の正常な過程において、諸個人はこの道徳的共同態への帰依を根拠として、相互に個人としての他者の尊厳の全意味を受け入れることができ、それによって有機的連帯が可能になる、と著者は捉えている。デュルケームの機能分析において、「社会的欲求」の評価的中身として考えられているのは、個人の人格の自律性と社会に対する個人の緊密な依存との同時的解決であるが、それは、この哲学を前提にしたものなのである。ところで、この考えは連帯主義の思想内容と符合するものであり、著者は、デュルケームの連帯論が当時の急進社会主義派の連帯主義（solidarisme）に対し有力な理論的根拠を提供するものであったことを綿密な分析で示している。

ところで、再編成された「職業集団」は基本的には経済的機

能によって定義されるが、その第一次的な機能は構成員に対し道徳規制を強化することである、と捉えられる。更に、国家とそれから〈遠く離れた〉無数の諸個人との間には道徳的に重大な空虚が生ずるが、これを埋める中間集団としての役割がそれに求められている。これは、孤立した諸個人に安定した集団所属感を与え、彼らを社会の統合的全体へと連結させるという役割である。

このように、デュルケームの考えを決定的に特徴づけているのは、それが人間や社会についての功利主義的価値づけを退け、社会的諸機能の自生的な協力による有機体的統合という概念に依拠していることである、と著者は解釈している。そして、ここから多元的国家論の系譜につらなるデュルケームの国家観も理解されている。国家の役割は道徳的なそれであり、諸集団の特に経済的諸機能を規制するところにある。ここでもやはり、共同態の理想を中核とした哲学が前提とされているのである。

六

以上、筆者は本書の紹介を、著者が解明したデュルケームの社会概念を中心に行なってきた。著者が提示したデュルケームの社会概念は、普仏戦争敗北後のフランス社会を社会学によって再建するという・デュルケーム社会学の周知のひとつの像を、最も根底的な側面から充分説得的に解明するものであった。次にここでは、本書のこうした指摘の妥当性を基本的に認めつつ幾つかの問題を考えてみたい。

そのひとつは、「デュルケームにおける経済-社会-道徳」の問題である。従来の研究では、デュルケームにおいては経済に対して道徳が対置されているとされ、経済の無規制的活動を道徳が規制するというかたちで捉えられてきた。経済は道徳によって規制されるべきである、というこの解釈は勿論基本的には正しいが、やや単純すぎる嫌いがある。筆者は日頃抱いていたこうした印象を本書によって更に裏付けることができた。それは、やや図式的に言えば、デュルケームにおいては、経済は「社会」の中で営まれてこそ道徳に転化すると考えられており、経済界をまず「社会」のなかにおくこと、経済界を十全な意味で「社会」たらしめること、それが必要だと考えられているということである。だから、職業集団の機能もすでに五でみたように、諸個人に安定した集団所属感を与えることが先ず第一であると考えられている。こうした道徳的共同態としての職業集団のなかで経済が道徳に転化する。この道徳は、「共同の観念や信念のうち、人々の意志に対して理想的行動のプログラムを示し、それに従うことが義務的であるという判断による」（五一頁）観念として規定されるものである。道徳的共同態としての社会においては、従って、その拘束力の源泉が集合生活の自発的・自生的所産であるとき、経済的諸活動からこうした準則（règles）としての道徳が生ずる。ある一定の行為様式がやがて慣習的になり、ついには「社会」による聖化によって義

務的（obligatoire）となるのである。これは、道徳は社会の所産というデュルケームの考えに適う解釈であろう。勿論、ここで言う経済は古典派経済学の描くそれではなく、〈全体〉の発見とともに見出された、「国民経済」である。とまれ、デュルケームは、職業集団を道徳的共同態としての社会として再建しようというのである。その結果、職業道徳というかたちで構成員に対して道徳的規制を強化するという職業集団の機能がでてくる。なお、「ラインの彼方」（outre-Rhin）の講壇社会主義者、特にシュモラーからの大きな影響――その古典派経済学批判――もこうした視点から再解釈できると思う。ここは筆者の論点を敷衍する場ではないので指摘だけにとどめるが、いずれにせよ本書の論点を踏まえるならば、経済と道徳についてのデュルケームの考えをその社会概念によって従来の解釈以上に明確にすることができる、と考えられる。

七

次に、デュルケームが社会を生命性において捉えているという、本書の中心的論点について触れたい。これは、社会を、固定的な面からのみでなく、しなやかさを与える沸きたっているものという面とも動的連関において捉えるという点で、固定化・硬直化した現代社会を捉え直すひとつの論点を示すものであり充分評価できるのだが、筆者はそこにデュルケームの社会観の弱さもあると考えたい。それは第三章で扱われている集合意識の問題にも関係するものである。先ず、それに拠って本書の内容を紹介しておこう。

一でみたように、デュルケームは社会の本質を“la vie sociale”、社会生命（＝いのち）と考えている。そして、集合意識はこの社会の心的生命の直接的かつ自然的表現であると考えられている。この集合意識という概念は、集合生活に固有の心的事実と、一定の行為様式とが統合的に考慮されるべき概念である。しかし、集合意識は、後者のように「社会的存在」（être social）として様式化され、あるいは具体的に宗教的・道徳的・法律的諸制度のような確定的形態をとるにしても、それ自体は、諸制度が社会的といわれるための前提となる共有的な概念である、と著者は指摘している。

更にこのことは集合意識をギュルヴィッチの「深さの社会学」流に層位構成の面から捉えることによっても示されている。集合意識には、「物化」された表層の形態学的諸事実から、「社会的存在」（具体的には社会的制度）を経て、必ずしも具体化されることのない無定型かつ自由な集合的生命そのものの顕現などの諸層が考えられ、そして、集合意識の意味の中核的部分はこの最後のものだと言われる。ここで、こうしたデュルケームの考えがもつ問題点と思われるものを指摘することができよう。

デュルケームは、社会の本質を“la vie sociale”と考え、その直接的・自然的表現として集合意識を捉えており、両者は一体として「社会生命-集合意識」と考えてよいものである。そ

して、この社会生命-集合意識を基礎にして宗教的・道徳的・法律的諸制度といった「社会的なもの」が考えられる。この「社会的なもの」は本質である社会生命-集合意識からは区別されるものである。

それでは、「社会的なもの」を背後で支える社会生命-集合意識のその形成のメカニズムについて、デュルケームはどのように考えているだろうか。著者もその註で、「社会的基体と集合意識との関係を媒介する社会的メカニズムについて、デュルケームは体系的な論議を深めたとはいえない」（一一八頁）と述べているように、それはきわめて曖昧なままである。デュルケームは「化学的綜合」の観念のアナロジーを持ちだすだけで済ませているのである。「生命はこのように分解されえないだろうし、生命はひとつのものであり、基盤としてはその全体性における生きた実体しかない。生命は諸部分の内にではなく、全体の内に存する」（『社会学的方法の規準』）とするのは、生気論（vitalisme）的発想ではなかろうか。すなわち、本質についての存在条件が与えられていないのである。「社会的なもの」を設定するにあたって、存在条件の与えられていない本質を措定する「本質主義」、という問題をデュルケーム社会学は示している。勿論、ここには社会科学における全体論(holism)という複雑な問題が関係しており、ネガティヴな脈絡でのみ捉えることはできないだろうが、デュルケーム理論のもつひとつの脆さは指摘できよう。

八

次に問題としたいのはデュルケームの発生論的視点についてである。すでに三でみたように、デュルケームはこの視点から「始原」に関心を寄せている。そこで本質性を把握するためのこの「始原」は、デュルケームにおいてはオーストラリアの原住民の宗教生活に求められている。こうして、デュルケームは民族誌の重要性を指摘するのである。

すでにみてきたように、この発生論的視点にはデュルケームの独特な・社会の概念化が前提とされていたが、「始原」に溯って民族誌を重視し、オーストラリアの原住民の社会に「原初的＝原理的＝基本的（élémentaire）なもの」（二〇八頁）を求めるというのは、進化論的色彩がきわめて濃いといわざるをえない。歴史と論理の混同である。この点を考慮に入れてか著者も次のように述べている。「実在の原初形態と歴史的所与の形態との間の根底的な連続性を前提として認める歴史観が〔そこに〕ある」（二〇八頁）。

勿論、オーストラリア社会の分析に基づくデュルケームの主張は、「宗教生活は集合生活全体の卓越した形態であり、いわば、その集中的表現でなければならない」（『宗教生活の原初形態』）という考えに基づいたものであり、宗教を社会理解の鍵とみる重要な見解をウェーバーとともに示した（ルックマンの評）、というその意義は過少評価されるべきではない。こうし

た意義にもかかわらず、筆者がデュルケームの進化論的限界という面に拘泥するのは、思想史的にみて重要な位置を占めていると思われる彼の歴史学認識を考慮に入れてのことである。彼は〈事件〉(événement) と〈制度〉(institution) の二分法を基礎に、前者に圧倒的に優位を与える・事件史中心の伝統的な歴史学を批判して、後者、つまり〈制度〉を対象としてこそ歴史学は科学的となるし、〈制度〉の認識によってはじめて〈事件〉の理解も可能になる、という考えを示している。こうした彼の歴史学観は後のアナール派の考えと軌を一にするものといえる。このように、デュルケームの歴史（学）観には限界と可能性が混在している、と筆者は考える。

おわりに

以上、関連の諸学説とデュルケームの位置する知的伝統との深い理解に支えられつつ、最も難解とされている社会概念の検討を中心に書かれた本書の内容を、それがひとつのデュルケーム像を結ぶように意図して、筆者は紹介してきた。著者によるデュルケームの社会概念の闡明の意義はきわめて大きい。このことはいくら強調しても過ぎるということはないであろう。そして、著者は〝何故いまデュルケームか〟という問いに、「われわれが今日逢着している諸問題を如何に社会学的にとらえ直すかの課題に〔対して、その答は〕、右のような彼の基本的に綜合的な発想が与える深い示唆のうちにあるのではないかと思われる」（序文）という解を与えている。これは、デュルケーム理論の基礎に横たわる社会概念の検討というその研究スタイルを反映しており、デュルケームの個々の論点に性急に現代的意義を求めようとするものではない。なお、著者がこうしたデュルケーム研究を更にコミュニティ論というかたちで発展させていることは、他の論稿が示しているとおりである。こうした意味においても、本書は単なるデュルケーム解釈にとどまるものではない。いずれにせよ、本書が社会学における古典研究のひとつのあるべき姿を示していることは確かなことである。その深く掘り下げられた内容は要約・紹介などをはるかに越えるものであるし、筆者の紹介も誤解に基づいたものではないかと恐れる。また、重要な論点を含みながらここで取りあげることのできなかった章もあり、著者の許しを乞いたい。（了）

（筆者　なかじま・みちお　奈良女子大学 人間文化研究科〔社会学〕助手）